国語科教育における小学校と高等学校の交流学習の可能性

東京学芸大学附属大泉小学校　上田真也
山下美香
東京学芸大学附属国際中等教育学校　廣瀬充
若宮知佐
浅井悦代

目　　次

1．はじめに …… 114

2．小学校5年生と高等学校3年生の交流学習 …… 114
　2．1．小学校5年生の学習の実際 …… 114
　2．2．高等学校3年生の学習の実際 …… 116

3．小学校4年生と高等学校3年生の交流学習 …… 120
　3．1．小学校4年生の学習の実際 …… 120
　3．2．高等学校3年生の学習の実際 …… 122

4．おわりに …… 124

東京学芸大学附属学校　研究紀要　第 44 集

国語科教育における小学校と高等学校の交流学習の可能性

東京学芸大学附属大泉小学校　上田真也
山下美香
東京学芸大学附属国際中等教育学校　廣瀬充
若宮知佐
浅井悦代

１．はじめに

東京学芸大学附属大泉小学校と東京学芸大学附属国際中等教育学校では，国語科の学習の中で，小学生と中高生による交流学習の可能性を探ってきた。現在のところ，2つの実践が継続して行われている。コミュニケーションに関わる能力を，異年齢を相手に体験的に学ぶことを目標としている。ここでは，その2つの実践について，小学校と中等教育学校のそれぞれの立場から，学習の概要について報告する。

２．小学校５年生と高等学校３年生の交流学習

本実践では，高等学校3年生（中等教育学校6年生）が小学校5年生に対してプレゼンテーションを行った。実際の交流場面では，まず高校生が対立する二つの立場からプレゼンテーションを行い，次の時間でそのプレゼンテーションを聞いた小学生が「どちらが正しいか」を話し合う活動をした。

なお，本実践は今のところ2015年度（平成27年度）と2016年度（平成28年度）に行っている。本稿では基本的に両年度に共通する枠組みを説明し，区別が必要な場合のみ実施年度を記載する。

２．１．小学校５年生の学習の実際

(1) 単元の目標

国語への関心・意欲・態度	高校生のプレゼンテーションが示すテーマについて，自分の意見を持とうと意欲的に聞き，自分の見方考え方を話しながら，テーマについて深く考えようとする。
話すこと・聞くことの能力	自分の意見や相手の意見について，根拠と意見を区別しその関係を考えながら，話したり聞いたりすることができる。
言語についての知識・理解・技能	意見は，根拠と意見に分けて考えられ，その関係が大切になることを理解することができる。

(2) 単元について

ｉ．話し合うテーマの設定

小学校国語科の高学年では，根拠と意見を区別して話したり聞いたり，読んだり書いたりすることが目標となっている。文章の読解では，筆者の意見とそれを支える根拠の関係を読み取る活動が設定され，一つに定まっている筆者の意見を読み取っていく。本単元で扱うテーマは，そのテーマににについて一つの定まった意見はなく，二項対立の意見があるテーマとした。そうすることで，児童は自分が主張する意見を明確にすることができたり，自分と異なる意見についても理解しやすくなったりする。児童は，興味を持って活動に取り組み，意見と根拠の関係を考えながら話し合うことができると考えた。

ⅱ．単元の展開

本実践は，次のような計画で活動を設定した。

時	活　動　内　容
第1時	・高校3年生による二項対立的なテーマのプレゼンテーションを聞く。プレゼンテーションは3本あり，全員の児童が3本のプレゼンテーションすべてを聞く。 ・それぞれのテーマについて，自分の意見とその根拠をワークシートに記入する。また，次の時間に話し合ってみたいテーマを3本の中から選び，希望する順に記入する。
第2時	・4人グループで一つのテーマについて話し合う。（4人グループは，二項対立の意見が2名ずつになるように組み，テーマはなるべく児童の希望に沿うようにする。） ・各グループの話し合いには，コーディネーターとして高校3年生が1名ずつ参加する。

(3) 単元の活動（全2時間）

時	主な学習活動と児童の様子	評価
1	○高校3年生による二項対立的なテーマのプレゼンテーションを聞く。プレゼンテーションは3本あり，全員の児童が3本のプレゼンテーションすべてを聞く。 ★住むなら沖縄と北海道のどちらがいいか。 ★黒板とホワイトボードのどちらに統一すべきか。 ★小学校で英語学習は必要か，不必要か。 **発表されたテーマについて自分の意見を持とう** ○それぞれのテーマについて，自分の意見とその根拠をワークシートに記入する。また，次の時間に話し合ってみたいテーマを3本の中から選び，希望する順に記入する。 ・住むなら沖縄がいいと思います。北海道では雪への対応が大変だからです。 ・統一するならホワイトボードがいいと思います。理由は，手が汚れないし，消すときに黒板のように粉が飛ばないからです。 ・小学校での英語学習は必要だと思います。英語に慣れておけば，中学校へ行ってからの授業で困らないからです。	●それぞれのテーマに対して，自分の意見とその理由をワークシートに記入することができているか。
2	○4人グループで一つのテーマについて話し合う。 ※4人グループは，二項対立の意見が2名ずつになるように組み，テーマはなるべく児童の希望に沿うようにする。 ※各グループの話し合いには，コーディネーターとして高校3年生が1名ずつ参加する。 ・私は，住むなら沖縄がいいと思います。北海道では雪への対応が大変だからです。 ・でも，沖縄も夏や秋に何度も大きな台風が来て，毎年大きな被害がでているから，同じように大変だと思います。 ・北海道に住めば，簡単にいい雪でスキーが楽しめるし，自然環境にも恵まれているので健康的な生活が送れると思います。	●話し合いながら，相手の話を根拠と意見に分けてワークシートに記入することができる。

	○コーディネーターとして参加している高校3年生が，停滞している話し合いを進めるために論点の転換を促す。 ・（高校3年生）ホワイトボードか黒板かで話し合っていても，どちらにも利点と欠点があって，話し合いが進まないですね。今回は，どちらかに統一するというテーマでしたが，統一すること自体は，いいことなのか問題があることなのか，どちらだと思いますか？ ・統一しないで，それぞれが好きなものを使えばいいと思います。それぞれ納得のいく物をつかった方がいいからです。 ・でも，統一しなかったら，教室によって違ってしまい，チョークを用意すればいいかマーカーを用意すればいいか，分からなくなってしまうと思います。だから，統一した方がいいと思います。	●新たなテーマについて自分の意見とその根拠をワークシートに書くことができたか。 ●話し合いながら，相手の意見について自分の意見とその根拠をワークシートに書くことができたか。
	○話し合って考えたことをワークシートに記入する。 ・ホワイトボードか黒板かというテーマだけでなく，統一するかどうかについても考えられたのでよかった。 ・自分の意見だけでなく，友達の意見についても根拠と意見をつなげて考えられたのがよかった。 ・話し合いが進まなくなった時に，高校生の方が新しいテーマを考えてくれたのがありがたかった。	●話し合い全体の展開を振り返り，相手の意見についても根拠を明確にすることや，論点が変わったことで話し合いが進んだことに気付き，ワークシートに書くことができたか。

※実際の授業では，論点の変更は教師の側から示した。（平成27年度）

（4）成果と課題

ⅰ．成果

・5年生の児童にとっては，意見を根拠とのつながりを明らかにして話し合うことのできる有意義な活動となった。話し合うだけでなく，ワークシートに書くという活動を設定することで，より根拠と意見の区別や関係を意識することができた。

・高校3年生からのプレゼンテーションが，具体的な映像資料を用いながら短時間で分かりやすいものになっていたことで，児童に興味を持たせることができた。

・話し合いが平行線になって停滞するという経験と，そこから新たなテーマを示すことで話し合いが活性化することを体験的に学ぶことができた。

ⅱ．課題

・平成27年度の実践では，論点を転換していくことを教師の側で行ったが，将来的には高校3年生で行えることを目指したい。しかし，教師が論点の転換を行った際にも，それまでのテーマでの話し合いと関連させて話し合えていない実態もあった，どこまで高校3年生にコーディネーターの役割を求めるかという課題があるが，小学校5年生の側でも，最初のテーマについての話し合いを踏まえて，転換後のテーマについても話し合えるようにできる手立てが必要になることが分かった。

（上田）

2．2．高等学校3年生の学習の実際

（1）目標と単元観

本実践は高校3年生の「国語表現」の枠で実施しており，2015年度は1クラス15名，2016年度は3クラス計50

名が対象であった。1グループあたり5 ～ 6人になるように，1クラスを三つのグループに分けて行った。各グループで対立する立場を設定できそうなテーマを考えて7分間のプレゼンテーションを行うことが高校生の主な学習活動である。高校生の学習としては，主に次の点を目標としている。

①低年齢に対するプレゼンテーションを通して，相手に応じた話題の選び方や聞き手の立場に立った言葉の選び方・伝え方を考える。
②議論させる立場に立つことを通して，議論可能（debatable）な問いとはどのようなものかを考える。
③議論の展開を予測し，議論が停滞した時に活性化させるような問いとはどのようなものかを考える。（2016年度のみ）

普段関わることのない「自分より年少の者」を相手にプレゼンテーションをすることで，話題の選び方や伝え方を工夫する必要性を学ぶ場となる。そして，その後の小学生の話し合いの姿を通して，自分たちの説明がうまく伝わっているかを振り返ることもできると考えられる。

また，本実践の前にはディベートの学習を行っており，これらは連続した学習として展開している。まず自分たち自身がディベートを行うことで，葛藤が生まれるような問い，議論に耐え得るような問い（=debatable な問い）とはどのようなものかを経験として理解し，次にそれを設定する側に立つことで意識化・明示化していく。そのような過程を通して，課題を発見する力や解決する力を総合的に伸長することをねらっている。

2015年度の実践では上記の二点を目標として臨んだが，小学生の話し合いの場面で，片方の立場の優位を主張することに終始して議論が平行線となってしまう様子が見られた。その場では即時的に教員が論点を転換して話し合いを活性化させたが，2016年度ではその気づきを学習に位置付け，高校生自身の目標として設定することを試みた。この点については後に詳述する。

(2) 流れ

学習の流れを右に示す。

前単元	ディベートの学習（全5 ～ 6時間）	
第1～2時	プレゼンテーションの概説・テーマ決め・準備	
第3時	小学生にプレゼンテーション	交流場面
第4時	小学生のディスカッション	交流場面
第5時	振り返り	

交流前には，プレゼンテーションの大まかな流れを授業者から説明し，各グループでテーマを決め，準備する時間を設けた。テーマを決める際は，ディベートの学習を踏まえて，対立する立場で議論できそうなものを考えさせた。2015年度と2016年度に実施したテーマは下表の通りである。

テーマ一覧

2015年度		①住むなら沖縄か北海道か？ ②ホワイトボードと黒板，統一するならどっち？ ③小学校で英語を学ぶべきか？
2016年度	A	①制服がいい？　私服かいい？ ②タブレットがいい？　教科書がいい？ ③宿題はあった方がいい？　ない方がいい？
	B	①君は制服が好き？　私服が好き？ ②タブレット学習 vs 教科書 ③自然とテーマパーク，遊ぶならどっち？
	C	①中学校の土曜授業は必要か？ ②お米とパン，どちらを食べますか？ ③過去の自分と未来の自分，話に行くならどっち？

また，準備するにあたっては，「それぞれの立場を支持する根拠を考えて，論点を明確にすること」，「発表形態は特に問わないが，データや写真，事例などを用いて分かりやすくすること」，「発表に使える時間は実質30分程度なので，グループの入れ替えも含めて時間が伸びないように準備すること」などを注意点として伝えた。

実際の交流場面での各グループのプレゼンテーションはおおよそ以下のように展開した。

簡単な自己紹介や挨拶 → テーマを伝える → 小学生の現時点での考えを聞いてみる
→ 二つの立場からプレゼンテーションをする → 質問タイム → 挨拶をして終了

1グループあたりの発表時間は自己紹介や質問タイムを含めて7分間である。パワーポイントや模造紙を使って発表するグループが多かったが，中には紙芝居風にまとめたグループもあった。2015年度は小学生3クラスに対して高校生1クラス（3グループ）だったので，1クラスに1グループずつ分かれて入り，全クラス一巡するように同様のプレゼンテーションを3回繰り返した。2016年度は高校生も3クラスだったため，小学生1クラスに高校生1クラス（3グループ）が入り，1回ずつ順番にプレゼンテーションを行った。2015年度の方式の方が，3回発表できるため，うまくいかなかった点を修正したり，各クラスの児童の雰囲気の違いを感じ取れたりと，高校生にとって学ぶ点は大きかったように思われる。

次時の小学生の話し合いの場面では，高校生は各グループに分かれてディスカッションを観察し，必要であればメモをとったり，小学生からの質問に答えたりするように指示をした。ただし，2016年度はそれに加えて「議論が停滞した時に活性化させるような問いを投げかけてみる」ことを目標としている。次項でこの点について詳しく述べたい。

交流学習終了後，振り返りの記述と発表に用いた資料の提出をし，実践を終えた。

(3) 論点の転換について

先述したように，2015年度の実践において，小学生の話し合いが平行線となり，停滞してしまう様子が見られた。例えば，自分の立場の優位性を「なんとなく」でしか表現できなかったり，最終的に好みの問題だと割り切ってしまい，それ以上議論が深まらなかったりして，「なぜ相手はそのように主張しているのか」「そもそもなぜそういった対立が起こっているのか」といった点まで考えが及んでいる児童はあまり多くはなかった。

こうした事態が起こった原因として，そもそものテーマ設定にも問題があったことは否めないが，対立する立場を設定している以上，議論が平行線となるのは構造上仕方のないことでもある。そこで2015年度は，教員が話し合いの途中で次のような言葉を投げかけ，話し合いの活性化を促した。

①住むなら沖縄か北海道か？
→例えば明日急に引っ越すことはできる？　引っ越すかどうかって自由に自分だけで決められること？
②ホワイトボードと黒板，統一するならどっち？
→そもそもどちらかに統一すべき？　何かに統一するって大事なこと？
③小学校で英語を学ぶべきか？
→そもそもどうして言語を学ぶの？　日本語を喋れるのになんで国語を勉強するの？

2016年度ではこの反省を活かして，あらかじめ高校生に「議論がどのように展開していくか」を予測させ，「議論が停滞したときにどんな問いを投げかければ議論が活性化するか」を考えさせた。そして小学生の話し合いの場面では，話し合いの状況を見て適宜問いを投げかけたり，論点を転換させたりする役割，つまり議論をファシリテートするような役割を担わせた。この試みの成果と課題は，実践全体の成果と課題と併せて次項で述

べる。

(4) 成果と課題

実践の最後に生徒に対して行った振り返りの項目は以下の通りである。

①1日目のプレゼンテーションをした時の小学5年生の印象は，想像していたものと違いましたか？ それとも，想像通りでしたか？ 違う部分があれば，どのように違ったかも書いてください。
②プレゼンテーションを終えた時，伝えたい内容を分かりやすく伝えられたと感じましたか？ また，自分たちのプレゼンを受けて，小学生は次の日にどのような議論をすると想像しましたか？ 話し方やプレゼンの進め方などを振り返りながら書いてください。
③2日目の小学生の議論の様子を見て，自分たちのプレゼンはどれぐらい伝わっていると感じましたか？ 1日目の手応え（②）と比べながら書いてください。
④先生が途中で投げかけた問いは小学生の議論に対してどのような影響を与えたと思いますか？（2015年度）
④議論の途中でどのような問いを投げかけましたか？ また，それは小学生の議論に対してどのような影響を与えたと思いますか？（2016年度）
⑤実際にプレゼンをし，議論の様子を見てみて，自分たちの決めたテーマは小学5年生が議論するのに適切なテーマだったと感じましたか？
⑥議論を活性化させるようなテーマや問いとはどのようなものだと思いますか？
⑦ディベートの学習は，テーマ決めの際に役に立ちましたか？ その他，ディベートとのつながりを感じる部分はありましたか？
⑧今回の学習を通して，何か得られたものはありますか？ その他，感想をどうぞ。

これらの項目についての生徒の記述をもとに，はじめに挙げた3点の目標に即して成果と課題を考察したい。

まず，話題の選び方や伝え方に関して，「伝えたい内容はしっかり伝えられたと思う」「（小学生の話し合いの様子を見て）ちゃんと私たちのプレゼンを聞いてくれてたんだなというのが分かりました」「ポスターでプレゼンテーションを行ったことによって……分かりやすく伝えられた」という手ごたえがある一方で，「伝えたい内容をあまり伝えられたと感じなかった」という記述もいくつか見られた。「自分の声が小さかった」「もう少し分かりやすく説明したり，身近な例を使ったりしたら良かった」「もっと個人の経験・実体験を思い出させ語れるような質問をなげ掛ける」など，具体的な反省点を挙げている生徒もおり，メタ言語的な意識をもたせられたのは本実践の成果である。「話し方が少し幼稚すぎたかもしれない」という記述からは，プレゼンテーションをしながら相手の反応を確かめていたことが分かり興味深い。今後は，交流前にプレゼンテーションのリハーサルやグループ間での相互評価を行う時間を十分に取れるとより効果が高まると考えられる。

次に，議論可能（debatable）な問いに対する認識の深まりという点については，「メリット・デメリットの量や内容，どちらを支持するのかに偏りがないもの」「正解がなくどちらの側にも大きなメリット・デメリットがあるもの」など，ディベートとのつながりを感じさせる記述が多かった。また，「身近で何らかの形で皆，関わった内容」「その年齢に応じたものになっているか」のように各自の実感に基づいたものや「個人の好みに分かれるものは……すぐおわってしまうから×」「あまりにも幅があるテーマは，アイデアがたくさんですぎてまとまらなくなったり，話がそれてしまったりする」といった良くないテーマを記述した生徒もいた。同じテーマでもうまくいったと感じる生徒とよくないテーマだったと感じる生徒とがおり，生徒によってそもそもどのような議論を良しとするかが異なる側面もあることが分かった。「視点を変えて話せるもの（どっちが絶対良いのか→どんなときにどっちが良いのか→では統一するならどっち？のような）」「違う視点からテーマを考えて話が弾

むような質問を問いかけることが重要」という記述は，次の「論点の転換」にも関わる点だろう。

「論点の転換」について，2015年度の教員が新しい問いを投げかけた実践においては「academic な問いを聞いて小学生は…多角度でさらに考えていた」「先生が途中で投げかけた問いによって議論の内容は深まったと思う」など，その有効性を感じている生徒が多かった。ただ，「小学生には難しかった，あるいはどう考えれば良いのか分からなかった」「先生が投げかけた問いに対してのみ考えるようになってしまって…私たちの問いと一緒に考えることが出来ていなかったような気がした」というように「論点のずれ」としてネガティブに捉えた生徒もわずかながらいた。テーマによってどの程度の転換が効果的なのかが異なる可能性もある。今後の課題としたい。

一方，2016年度の高校生自身がファシリテートする実践では，「『そもそも制服・私服どちらかにさだめなければいけないのか』という問いを投げかけました。この問いによって今までは自分の側の意見ばかりを主張していた小学生が相手側の良さについても考え，どのようにしたら合意形成ができるか考えていたと思います」「『そもそも日本政府はなぜタブレットかを遂行したのか』という問いを投げかけた。…議論で行き詰まった時には少し視点を変えてみるという解決方法を教えられたと思う」「『そもそもどちらかに統一する必要はあるか』という問いに対して，小学生たちは，自分の立場を変えることなく，統一する必要があることをメリットとともに発言し，さらに白熱した議論ができていた」というように意欲的に試みて手ごたえをつかんだ生徒もいたようである。「相手側のメリット考えてだしてみたらどうだろうか」「それってデメリットだよね?」「じゃあ，何年生からなら使えると思う?」など，「論点の転換」まではいかずとも，話し合いの流れを考えて深まるような質問をなげかけている生徒も見られた。「おもしろい意見を聞くことができた」「うまくファシリテートできた」という感想もあれば，「あまり興味をもってくれなかった」「案外反応が薄かった…そこから議論が広がることはなかった」という感想もあった。総じて，今回の実践ではプレゼンテーションを作成することでいっぱいとなってしまい，議論の予測と論点の転換の問いをじっくりと考える余裕があまりなかったことが大きな課題として残った。次年度以降はリハーサルも含め，時間配分に余裕を持たせて臨みたい。

高校3年生が授業として小学生と触れ合うことはほとんどないため，本実践のように同年齢や年長者との関わりでは意識化されることのない問題・課題に気づくことのできる機会は，高校生にとっても非常に貴重な経験である。また，本校の生徒は附属大泉小学校の出身の生徒も多く，2回の交流の時間を楽しみにしている姿も多く見られた。このような実の場における学習を大切にして，今後も継続して実践を積み重ねていきたい。

（廣瀬）

３．小学校４年生と高等学校３年生の交流学習

３．１．小学校４年生の学習の実際

(1) 単元の目標

国語への関心・意欲・態度	体験学習で自分が学んだことについての発表を高校生に聞いてもらい，発表の内容や構成，話し方などについての助言を得ようとする。
話すこと・聞くことの能力	自分が取り組んだ課題に対する研究について，研究の動機や経緯を説明したり，実物や写真，図などを効果的に使ったりして，発表することができる。
言語についての知識・理解・技能	伝えたいことの中心や発表の構成が分かるように，文字の大きさや配列に気をつけて，発表に使用するポスターを書くことができる。

(2) 単元について

ⅰ．実践の背景

5月の千葉県南房総市富浦町における移動教室で実施された体験学習（本校での名称は「フリータイム学習」）では，4年生の児童全員が，選択した素材について現地の専門家の方からの指導のもとに体験学習を行う。移動教室前の事前学習から，十分な時間をかけて課題に対しての体験的な追究活動を進め，現地での体験活動後は，学校に戻り発表会に向けての準備に取り組む。

ⅱ．交流相手である高校生の存在

本実践は発表会の1週間程前に行う実践で，児童の個人発表の準備がほとんど終わって一通りの発表ができるという状況の中で実施する。発表会本番では，保護者や下級生に対して個人の研究発表を行うが，本実践では，発表のリハーサルとして附属国際中等教育学校の高校3年生に発表を聞いてもらい，よりよい発表にするために助言をしてもらう。

高校3年生は，国語表現の学習の一環として，年少の異年齢に対する音声言語活動の場としてこの実践に参加している。年少者に対して，どのような言葉でどのように表現すればいいのかを学ぶ学習の場になっている。また，対象となる高校3年生には本校の卒業生が多く在籍し，小学校4年生時に同じように体験学習やその発表会を経験している。高校3年生が，自身の経験をもとに助言をすることができ，助言する高校生にとっても，助言を受ける小学生にとっても，魅力的な活動となり意欲を持って取り組める。また，高校生は，小学生が置かれた状況を具体的に想像することができ，より適切な助言をすることができると考える。

ⅲ．小学生児童の実態

4年生の児童にとって，体験学習についての発表会（「フリータイム発表会」）は，3年生の時に2度行っているため3回目の経験となる。3年生時の体験学習は，身近なフィールドから素材を選んで行い，その素材についての紹介をすることが中心である。発表の課題（テーマ）も，「○○について」といったものが多く，本で調べたり専門家に聞いたりして得た知識を紹介する内容がほとんどである。

しかし，4年生からは，選んだ素材から自分なりの課題を決めることに取り組ませている。同じ素材を選んだ児童であっても，課題が同じとは限らない。例えば，南房総市の伝統工芸品である「房州うちわ」を素材に選んだ児童は，児童によって「房州うちわの歴史」「房州うちわの作り方」「房州うちわのデザイン研究」「房州うちわと京うちわの違い」などのように異なる課題を設定している。そして，同じ素材であっても課題が違えば，準備する実物や写真，図などの資料も違ってくる。

そこで本実践では，4年生の児童に，個人発表において課題設定の動機や経緯を伝えることの必要性に気付かせたい。また，自分の課題に合った資料を活用することについても意識を高めていきたい。実際に自分の発表を聞いた上で助言する高校生の存在は，聞き手の立場から自分の発表を評価するための貴重な存在となってくる。課題設定の動機や研究の経緯を説明したり，課題に合った適切な資料を活用したりすることで，発表内容に独自性が生まれることに気付かせたいと考える。

(3) 単元の活動（全2時間）

時	主な学習活動と児童の様子	評価
1 2	○高校生14名と小学生96名が，14のグループ（1グループにつき高校生1名と小学生6 ～ 7名）に分かれる。 **フリータイム発表を高校生に聞いてもらおう** ○各グループで，1名の小学生が体験学習についての発表を行う。 ・小学生1名の発表時間は5 ～ 7分間。	

	・1枚の模造紙に，氏名，テーマ，研究内容（研究の方法や結果，分かったことなどを文章や図，写真等で説明）をまとめた物を掲示。 ・模造紙の前に立ち，その周りにいる高校生を含んだ6 ～ 7人に対して発表する。 ○高校生が，発表を聞いた上での感想を話す。 ・よかった点を話す。（声の大きさ，話す速さ，資料の分かりやすさ，効果的な具体物の活用等） ・改善点について話す。（その課題に決めた理由や，素材を選んだきっかけ等を話す必要性，自分ならではの体験について更に詳しく話すこと等） ○小学生の発表とその発表についての高校生からの助言という活動を，他の小学生についても行い，同様な活動を繰り返す。合計で3 ～ 4人の発表について行う。 ○最後に，高校生が，本日の活動全体についての感想を話す。 ・立派に発表できていたことを称賛。 ・独自性を更に強調すると効果的であることを助言。	◎聞き手である高校生からの感想と助言を真剣に聞くことができた。 ◎研究の動機や経緯を説明することの必要性を理解することができた。 ◎実物や模型などの具体物があると相手に伝わりやすいことを実感できた。 ◎発表の独自性についての視点を得ることができた。

(4) 成果と課題

ⅰ．成果

・4年生の児童にとっては，学習発表会当日を迎える前に，同学年の児童以外を相手に発表のリハーサルができるということ自体が貴重な機会となった。自分の取り組みを知らないであろう相手に対して，本当に伝えたい内容が伝わっているのかという意識を持たせることができた。

・発表内容がよりよく伝わるようにというアドバイスを，内容を事前に知らない相手からもらえることは，そのアドバイスの内容に信憑性が加わる。追究活動の動機を述べること，話す速さや目線，図や具体物の効果的な活用など，実際に初めて発表を聞いた相手からアドバイスされることで，実感をもってアドバイス内容を受け取ることができていた。これは，教師による指導では得られない姿であった。

ⅱ．課題

・高校3年生との交流となる時間では，場と時間の設定が重要となった。平成25年度に実施した際には，高校生に発表を聞いてもらう児童を7 ～ 8名のグループに付き2名の発表とし，その発表を1名の高校生が聞いてアドバイスするようにした。発表をしない小学校児童にとっても，自分の発表に置き換えて代表児童の発表やアドバイスを聞いていた。高校生は，2名の発表について十分に時間をかけて具体的にアドバイスすることができていた。しかし，平成26年度に実施した際には，小学校児童の全員に発表の機会を設けたため，アドバイスの時間が十分に取れず，目標とする姿に迫り切れない実態があった。場と時間の設定には，十分な配慮をする必要がある。

（上田）

3．2．高等学校3年生の学習の実際

今回，「現代文B」を選択している高校3年1クラスの24名（男子6女子18）で小学校を訪問した。「現代文B」は，将来の社会生活に向けて国語力を総合的に育成することをねらいとする科目であり，「目的や課題に応じて，収集した様々な情報を分析，整理して資料を作成し，自分の考えを効果的に表現すること。」（学習指導要領「3

内容」(1)-エ）という領域の学習として，年間指導計画の中にスピーチやプレゼンテーション，資料を用いての意見文作成などの活動を織り込んでいる。今回の交流学習はその一環として位置付けられる。

IB 校である本校は中学から高校1年にかけての MYP の課程で発表を伴う探究型学習を繰り返し経験させており，また海外での教育を受けてきている帰国生の影響もあって，本校高校2年生3年生のスピーチ，プレゼンテーション等の能力は相当に高い。しかし一方で，キラキラと発表する同級生たちの間で埋もれてしまい自分の能力に自信が持てず，スピーチなどの自己表出活動を苦手とする生徒も一定数存在する。「現代文 B」を選択している生徒は，「国語表現」選択生よりも，内省的で自己表出を苦手とする生徒の比率が高い印象がある。特に今回小学校を訪問した6年2組は，意見表明を得意とする数名の男子生徒を中心に授業が進んでいくことが多く，あまり主張をおもてに出さない生徒との差が広がってしまいがちなクラスである。「小学生の発表にアドバイスする」という今回の交流学習で，授業者としてはこのようなクラスの雰囲気がかき混ぜられ活性化することを期待した。

生徒たちはおおむねこの小学校訪問をたいへん楽しみにしている。クラスには附属大泉小学校出身の生徒も多く（24名中11名），彼らは母校に先輩として訪問することを誇りに思っている様子である。24名なので，10の発表グループに対して高校生が2人ないし3人付いてコメントするかたちになる。こちらで性別などを勘案して振り分け，「一人が代表してしゃべるのではなく，全員でバランスよく時間を使うように」とだけ注意を与えて当日に臨んだ。当日は，全体として高校生らしい大変良い態度で小学生に接することができた様子である。ひとつのグループだけ，小学生たちが自分たちで活発にディスカッションしてしまい高校生はやや困惑している状況が見られたが，他のグループは小学生の発表をメタ目線から評価し，より良いやり方をアドバイスすることができていた。さらにファシリテイターとして小学生たちから意見を引き出せているグループもあった。普段の授業で自信なさそうに意見を言う生徒が笑顔で胸を張って小学生に対している様子が印象的だった。

事後に生徒たちに書かせた振り返りシートの内容をご紹介する。小学生の発表に対しては，「内容としてはしっかりしている」「よく調べられており発表のクオリティが高い」「きちんと調べ学習ができていて情報が豊富」，また「写真や絵が使われていて模造紙の完成度が高かった」「基本的な発表態度（目線や立ち方，話し方）が既に身についている感じ」がした等，高く評価した者が多かった。一方で，「調べた専門的用語をそのまま使ってしまう様子がみられた」「調べたことを手際よくまとめた感じがあって，もっと自分の言葉で発表できるといいと思った」という意見もあった。

自らの学習経験としては，「アドバイスしなければという意識で聞いたことで要点を見つけるいい練習になった」「小学生であっても発表の基本は大人と同じだと思った。自分を振り返るいい機会になった」「調べ学習であっても，自分なりの意義や驚きを語ることが大事なんだと思った」「とにかく楽しそうに発表することが何よりも大切!」というように，年齢差のある小学生との交流であっても，アドバイザーの立場で「発表」というものをメタ認識できたことは自らに活きる体験となったようである。また，「小学生がどのくらいのレベルで理解できるのかが分からず適切にコメントできなかった」「アドバイスする時の言葉選びがとても難しかった。」「聞いている小学生たちがツボをついた意見を言ってしまい，自分はあまり出番がなかった」といった感想は，コミュニケーションの相手によって言葉の使い方や態度を工夫せねばならないことに気づけたものだと考えられる。

この交流学習の終了後，当該のクラスは明らかに授業の雰囲気が明るくなった。指導者の立場で子どもたちの言語活動をリードした経験が，「生徒」として閉じた空間の中で学習している意識を打破したと言ったら大げさだろうか。立派な内容を語ろうとするより，自分の言葉で楽しそうに語るほうが魅力的なのだと気づけたことは，特に発表を苦手としていた生徒たちにとって大きな収穫であったようである。

（若宮）

４．おわりに

小学4年生5年生と高校3年生という6年間程度の年齢差は，異学年の交流学習を考えた場合，同学年や近い年齢差での交流学習では得られない効果をもたらすと感じている。その分，それぞれの学習の目標を的確に設定し，双方にとって価値ある学びになるように学習を設定していくことが大切となる。今後も，実践を継続的に行いながら，学習の目標，活動，評価について修正を図っていきたい。